



学校便り「尚徳」10月号

第471号

鳥取大学附属小学校

平成23年10月25日

<http://www.fuzoku.tottori-u.ac.jp/~fusho/>

題字「尚徳」は、住川英明教授（地域学部）



気づく心

副校長 北村 順子

11月が近くなり、秋の気配が濃くなってきました。読書の秋、芸術の秋、スポーツの秋、そして食欲の秋。何をするにもよい季節です。高く澄んだ空を見ているだけでも、気持ちが爽やかになってきます。ついこの間まで、入道雲がいっぱいだったのに。ふと身の回りに目や耳を向けると、季節は確実に進んでいます。

この季節、自宅の近くに萩の花が咲きます。萩の花が散るのを「こぼれる」という表現を使うことを何かで読みました。四季がはっきりした日本。雨や風等の自然現象にも季節毎の名前をつけ、風情を楽しんできた文化があります。季節の変化と密着した生活を送るからこそ、日本人の感性は豊かなのかなと思ったりもします。微妙な変化に「気づく」「感動する」心を大切にしてきたのだなと痛感します。

私は常々子どもたちに、「気づく心」「感動する心」を大切にしたいと考えています。以前附属小学校で勤務していたとき、1年生の担任をしたことがあります。卒業式を花で飾ろうということで、秋から全校で一人一鉢運動に取り組みました。園芸に堪能な先生が、サクラソウを種から育てられ、各自が苗をもらいました。強く持ったら茎が折れてしまいそうな、本当に小さな小さな苗です。少しの液肥を大量の水に混ぜ、「元気の水」と称して、毎日

毎日水やりをし、子どもたちと成長を楽しみました。「元気の水」のおかげか、葉は白菜のようになり、たくさんのピンクや白の美しい花を咲かせました。その中で、子どもたちは白い花が咲く苗は茎が緑であること、ピンクの花が咲く苗は茎も赤っぽいこと、輪状に何段にもなる花は下の段から次々に咲いていくこと、花が咲くにつれて香りが強くなっていくこと等いろいろな気づきをしました。そしてたった一粒の小さな小さな種から夥しい数の花を見事につける自然の威力に感動すると共に、自然の不思議さに感動したのです。

わたしはふしぎでたまらない、黒い雲からふる雨が、銀に光っていることが。

わたしはふしぎでたまらない、青いくわの葉食べている、かいこが白くなることが。

わたしはふしぎでたまらない、たれもいじらぬ夕顔が、ひとりではらりと開くのが。

わたしはふしぎでたまらない、たれにきいてもわらってて、あたりまえだということが。

有名な 金子みすゞの「ふしぎ」という詩です。子どもたちにはこんなみずみずしい感性をいつまでも持っていてほしいと思います。11月の人権教育の講演講師は金子みすゞ記念館長の矢崎節夫さんです。今からお話が聞けるのが楽しみです。

【全力疾走～大運動会】



1日延期となった翌日の9月18日、天気も回復した秋空の下、大運動会を行いました。

今年は、「あつくなれ、附小のきずなしめすとき」というスローガンのもと、応援団や運営委員会を中心にして、準備を進めてきました。残暑厳しい中でしたが、6年生を中心にみんなで、

練習にも一生懸命取り組んできました。本番当日、元気いっぱい走り、演技し、友達を応援していた子ども達の顔は、秋の日差しに、きらきら輝いていました。高学年の心を一つにして完成させた組体操の演技、声の一つにして歌った応援歌、最後を飾った全校ダンス。どの演技からも子どもたちの熱い思いが伝わってきました。

終日応援してくださった保護者のみなさん、役員のみなさんありがとうございました。

【避難訓練(地震)】

9月6日、地震を想定した避難訓練を行いました。緊急放送後、多くの子どもたちが真剣な表情で避難場所へ移動しました。完了後の湖山消防署の署員さん

の講評でもたくさんのことをほめていただきました。

その後、1・2年の学級代表と3年生以上による起震車体験を行いました。当然のことですが、地震はいつどこで起こるかわかりません。今回は、津波を想定した訓練は行っていないですが、東日本大震災に学びながら、今後の児童の指導につなげていきたいです。



